



平成23年度鳥取県環境学術研究費助成研究（課題番号 B1103） 摩尼寺「奥の院」遺跡の環境考古学的研究

◆研究の背景

三徳山三仏寺を対象とする鳥取県の世界遺産申請が頓挫している。この閉塞状況を打開するため、2011年2月に国際シンポジウム「大山・隠岐・三徳山—山岳信仰と文化的景観—」を開催した。そこでの結論は、三徳山だけでなく、対象範囲を大山・隠岐国立公園や山陰各地の密教系諸山にひろげ、とくに「奥の院」の考古学的研究と国内外の類似資産の比較研究を進めるべきというものであった。シンポジウムの成果をうけて、私たちは鳥取市覚寺に所在する摩尼寺「奥の院」遺跡の発掘調査に取り組んだ。県内外を問わず、密教系寺院の「奥の院」に考古学的なメスが入れられることはほとんどなく、摩尼寺における発掘調査は学術的にきわめて意義深いものである。また、摩尼寺「奥の院」遺跡の巨巖には複数の岩窟・岩陰が人為的に彫り込まれ、多種多様な石仏・木彫仏や五輪塔が祀られている。その巨巖は樹林に覆われ、遺跡の平場から認識することもできなかったが、今春から始めた樹木の間引き伐採や除草などの清掃活動により、姿をあらわしつつある。本研究では、砂丘に近接する摩尼山を「山のジオパーク」、巨巖の露出する摩尼寺「奥の院」遺跡をジオサイトと認定し、市街地から山陰海岸に至る広域的な景観保全の可能性を探るものである。

◆摩尼寺「奥の院」遺跡—発掘調査と復元研究—

摩尼寺は帝釈天降臨と円仁再興の縁起をもつ天台宗の寺院で、現境内は山麓にあるが、山頂に近い標高約290mの地点に「奥の院」の遺跡が残っている。そこには巨巖に穿たれた岩窟・岩陰による多層構造の仏堂が現存し、その正面に2段の平場（加工段）が形成されている。2010年、「奥の院」の4ヶ所に計200㎡のトレンチをあげ、約4ヶ月をかけて発掘調査した。下層で平安時代後半の柱穴と井戸跡、上層で室町時代後期～江戸時代初期の大型仏堂跡（8間以上×8間以上）を検出した。出土土器の年代からみて、行場としての出発は奈良時代に通る可能性があるものの、下層平場と建築物の出現は10世紀以降に下るであろう。上層の大型堂宇については、「因幡民談記」（1688）に描かれた建物をモデルとし、山陰地域に現存する室町時代後期の寺院建築を参照しつつ意匠を復元した。山陰の場合、岩窟の内部に仏堂をまるごと納める構造が卓越し、その類例は福建省泰寧の甘露寺など南方中国に存在するが、摩尼寺「奥の院」では岩窟を覆うように木造建築を巖崖に密着させており、大分県六郷満山の懸造とも似て、華北の石窟寺院に源流を求めうるかもしれない。



図1. 南東からみた摩尼寺「奥の院」遺跡Ⅱ区



図2. 摩尼寺「奥の院」遺跡Ⅱ区（北から）



図3. 「奥の院」復元CGパース



図4. 「奥の院」復元CGパース（上層）

◆摩尼寺「奥の院」遺跡の環境考古学的研究

発掘調査の翌年、摩尼寺「奥の院」遺跡で出土した遺物の自然科学分析に取り組んだ。おもな成果は以下のとおりである。

- 1) ハンドオーガーボーリング調査により、自然堆積層が地表面下2.5mに達することがあきらかになった。
- 2) 花粉分析の結果、上層期の「奥の院」にマツ属が多く植えられていたことが判明し、「因幡民談記」所載絵図との一致をみた。
- 3) 発掘調査では土器の編年によって、下層を平安後期、上層を室町後期～江戸時代前期と推定していたが、遺物の数が少なく信頼性が高いとはいえない。2011年に放射性炭素年代測定をおこない、上記の年代観とほぼ一致をみた。
- 4) 下層整地土に含まれる大量の凝灰岩片は、地下で発見された平らな凝灰岩盤と同じ「変質凝灰岩」であり、岩陰仏堂周辺の「デイサイト凝灰岩」とは異なることが判明した。したがって、岩陰（および岩窟）の掘削年代は不明というほかないが、岩陰に安置された木彫仏は平安時代末期の作との見方が別教美術史の専門家より示された。その後、2012年春にも別の木彫仏が岩陰近くで発見され、現在、放射性炭素年代測定の準備に取り組んでいる。



図6. 「奥の院」出土土壌の花粉分析



図7. 「奥の院」出土の凝灰岩片

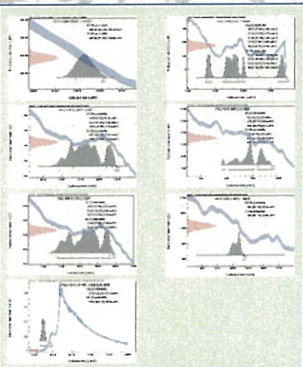


図5. 「奥の院」出土炭化物のC14年代暦年較正



図8. 発掘調査時（2010）

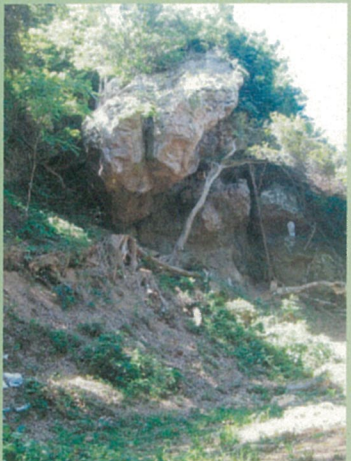


図9. 清掃後（2012）

・巨巖の前の大きな樹木の間引き伐採と除草をおこなったことにより摩尼寺「奥の院」遺跡の全貌を拝む事ができるようになった。今後、継続的に間引き伐採や清掃をおこない、かつての行場の景観を取り戻したい。

◆巨巖あらわる—山のジオサイトに向けて—

摩尼山の門前では、ほんの少し前まで精進料理の茶屋二軒が繁盛し、緑日にもぎわっていた。しかし近年、参拝客の減少が目立ちはじめている。今回の整備によりあらわになった「奥の院」の巨岩は、摩尼山を再活性化しうる文化遺産として評価できる。もともと自然豊かな風景をほこり、市街地からのアクセスも良いという魅力がある。そこで摩尼山と「奥の院」遺跡の保全活用による地域振興の途を探っていく。

- その保全活用として「奥の院」遺跡の整備活動を行った。巨巖の前には、大きな樹木が立ち並び、摩尼寺「奥の院」遺跡の全貌を拝む事はできなかった。そのため、巨巖を隠す樹木の間引き伐採をおこなった。
- 1) 樹木の番付とその位置を測量し、伐採する樹木を選定。
 - 2) 摩尼寺「奥の院」遺跡の植生について調査。加工段と斜面の樹種鑑定の結果、もっとも多くみられたものはヤブツバキ。続いて、スタジイ、アカシデ、イヌシデ、コナラなど、主に5種類が見られた。
 - 3) 巨巖を露にするために、斜面の灌木の除去および、巨巖を隠す樹木の間引き伐採を行う。
 - 4) 伐採によって出た樹木の活用として、シタケの原木栽培に試みた。原木にはスタジイとコナラを使用。
 - 5) 整備時に出た枯竹を利用し、摩尼山に登ってこられた人の荷物を置ける仮の休憩所となる竹棚を作り始めた。伐採で出た太いスタジイをツールとして再利用。竹棚からは巨巖が望め休憩するには良い場所だ。



図10. ツリーハウスづくり



図11. 「奥の院」での前留風景



図12. 巨巖の下を行列を成して歩く

<研究者プロフィール>

浅川 淑明（公立鳥取環境大学環境学部教授）

専攻はアジア建築史・歴史的環境保全論・地域生活空間計画。山陰各地の歴史的建造物・町並み・文化的景観に関する調査研究を推進しつつ、中国、インド、ネパール、スリランカ、ベトナム、ラオス、ミャンマー、ブータンなどで住居集落と仏教遺産に係わるフィールドワークを精力的に展開している。おもな論著に、「出雲大社の建築考古学」「摩尼寺「奥の院」遺跡—発掘調査と復元研究—」「大山・隠岐・三徳山—山岳信仰と文化的景観—」「はるかなまち、その未来—」「文化的景観としての水上集落論—世界自然遺産ハロン湾の地理情報と居住動態—」「鎌倉時代の神社遺跡に関する復元研究」などがある。

<研究室web>
<http://masc.kankyo-u.ac.jp/~asaj/>

<研究室blog>
<http://asahiblog1.lf2.com/>



図13. 景観保全のトライアングル

・中国自然歩道延長の提案
山陰海岸国立公園（とくに砂丘エリア）、立岩山坂谷神社（叢林が県指定保護文化財）、国史跡「鳥取城・太閤平跡」（久松山～樽銘）が形成するトライアングルの中心に摩尼山は所在する。それを現在の中国自然歩道（久松山～摩尼山）に加え、摩尼山と坂谷神社、摩尼山と山陰海岸のそれらを結ぶ結節点としての景観環境保護区域へ。